



(秩父連峰/甲武信ヶ武の山中より金峰山を望む)

水不足の夏

7月に入ると梅雨明けは、例年になく早くやってきてしまいました。地域に差はあるものの、ここ所沢の地では、梅雨らしいまとまった雨が降りませんでした。大地は十分な雨を吸収することなく、夏の太陽に照りつけられ、畑作物には辛い状況です。利根川水系の水ガメも先月の話では、貯水率は52%で過去最低とのこと。十分な水を貯められずに夏場に突入り、取水制限も時間の問題とのこと。ここ数年、夏場の水不足が毎年のように繰り返しています。元来、日本は梅雨と台風の到来により豊かな淡水が大地に内包され、上記写真のような緑豊かな山河が形成され、また豊かな恵みを楽しんできました。しかし気候変動によると思われる？毎年の水不足の現象は、豊かな水資源の国に育ってきた私たちに水との関わりかたを、根本的に変えることを迫っているようです。

電気の無駄を無くし効率的使用のために、今やスマートメーターの各家庭への普及が望まれており、企業もITを駆使した製品を市場に送り出しています。電気の流れをよく水流に例えられますが、水の効率的使用もスマートに家庭で管理する仕組みづくりが必要かもしれません。たしかに、水を節約する商品は、単体商品としては次から次へと開発されていますが、それを利用する人間が、それらを総体として管理し水の効率的使用を実現させるアイデアも必要でしょう。

また水については品質と言う課題もあります。水の品質が高いことは、極端な言い方かもしれませんが、それと関わる食べ物は当然として、それを素材の一部としている製品、あるいは生産工程のなかで水を利用している製品の品質にも大なり小なり影響しているようにも思われます。水の品質が優れているとは、安心・安全のベースであり、或いはそれ以上のものかもしれません。

水道の蛇口をひねると透き通った水がそのまま飲める。日本では当たり前のこのことが、実は貴重で、

貴重であることが、海外へ行ったときにわかります。その国の豊かさや公衆衛生に対する取組みにもよると思われますが、総じて水道の水をそのまま飲むということには、かなりのリスクを覚悟する必要があります。水事情の悪い都市では、それなりのホテルでも、バスタブの蛇口をひねったら色のついた水が出てきたことを経験された方もおられると思います。

日本の水、感謝すると同時に守っていく強い姿勢が問われています。

期待が動かす経済 II

リサイクル通信3月号で同じテーマで書かせてもらいましたが、これはその続編です。

6月の内閣府の月例経済報告や日銀短観を見る限り日本経済は上昇に向きを変えたようです。日銀のとった異次元の金融緩和が、予期しない長期金利の混乱を招いたものの、インフレ期待は市民権を得つつ、土地や株式への資金の流入をおこさせ、その資産効果により、まず内需の非製造部門が改善し始めました。次に円安が定着する中で、それまでの円高対応で筋肉質になっていた輸出企業の業績が大幅に改善し、製造業の業績が好転し始めた。こんな構図が見て取れます。

ただ、この流れが、中小企業に及んでいるかということ、まだそうではなそうです。短観にもみられますが、業況判断指数DIでプラスなのは、大企業と中堅企業の非製造業で、中小企業は全てマイナスです。特に製造業では相変わらず、-1.4と2桁のマイナスです。我々中小企業が、世間で言われているほど景況感を感じていないことと一致します。期待が動き始めた経済活動が、本来の政策目的である経済厚生なるものを高めるには、全産業で雇用者数が7割弱を占める中小企業の景況観がプラスになることが必要です。ただ中小企業においても短観では、前回3月調査と比較して変化幅は製造業・非製造業それぞれプラス5、プラス4となり、先行きについてもプラス改善の傾向が伺えます。その意味では希望が見えないわけではありません。

6月に発表された政府の第3の矢である成長戦略。中小企業対策については「日本産業再興プラン」の6番目に「中小企業・小規模企業事業者の革新」として出てきますが、中身のタイトルだけ見ていると、何やら昔の名前で出ています的な感をめぐえません。ただ、期待で動き出した経済と国の施策。期を一にして、我々も自らの成長戦略を企て、企業の新陳代謝というダイナミックな流れの中に飛び込んでいく覚悟が求められているのかも知れません。